

書 評

R. J. ウィルソン 著

熊原啓作 訳

「数学の切手コレクション」

1840年英国のローランド・ヒルによって世界最初の切手が発行されて間もなく、郵便切手を収集するという趣味、すなわち郵趣が誕生した。初期の郵趣家達は、全世界で発行される切手を集めていた。このような集め方をゼネラルと言い、切手の発行種類が少いためにできることであった。実際、1850年までには僅か154種しか発行されなかったし、1860年まででも913種に達したに過ぎなかった。

しかしこの数は急速に増え、1900年には15000種を越し、1950年には10万種以上、2000年には50万種を越し、個人の力ではゼネラル・コレクションは不可能となってしまった。

そこで、ゼネラルに代って登場したのが、国別コレクションとテーマコレクションである。国別コレクションとは、特定の国に的をしぼって、カタログに従って年代順に集める方式で、ある時代に限ることもある。テーマ・コレクションとは、たとえば犬と猫、赤十字、クリスマス等一つのテーマに従って、これに関連した全世界の切手を集める方式で、一つのトピックスに集中するので、トピカル・コレクションとも言う。

本書は、数学という一つの分野にまとをしぼったテーマ・コレクションに関する本である。扱っている切手は381種で、発行国は111ヶ国に及んでいる。この数学切手という分野は割合に新しい。それは、ある程度多くの種類の発行がなければ収集の対象とはなり得ないので、これが切手収集の世界で市民権を得たのは、「フィラマス」(アメリカ郵趣協会数学部門の雑誌)が発行を始めた1979年より少し前のことだろうと思われる。

数学切手とは、数学に関連した切手のことであるが、どこまでが関連しているかを決めるのは個々のコレクターの自由であって、それは各コレクターの、数学についての知識や、個人の趣味に依存している。著者のウィルソン氏は、グラフ理論、組み合わせ論、数学史を専門とする数学者であり、20年来毎月「フィラマス」に寄稿していて、切手収集家として著名である。その双方の豊かな知識の結合が本書と言えよう。

本書は55のトピックスに分類して、各トピックスでは4～9種類の切手とその解説があり、全体として、数学史や、数学と人間または自然とのかかわり合いが語られている。数学に興味を持つ人は、有名な数学者や数学公式が切手になっていることに親しみを感ずることだろうし、切手に興味を持つ人は、多くの美しい原寸、原色の切手を眺めながら、この国で、この時代に、こんな切手が発行されたのかと、知識を新しくすることだろう。また、今までどちらにも関心がなかった人でも、この本を、さし絵の代わりに切手が描かれている気軽な数学よもやま話として読めば、結構面白く、それによって、数学や切手に興味を持つようになるかもしれない。

日本切手は、これまでに3500種以上が発行されているが、本書で取り上げられたのは僅かに4種だけであり、日本人数学者で切手になったのは関孝和ただ1人である。フランスやドイツでは本書にそれぞれ30種の切手がとりあげられているのにくらべて、日本でももう少し数学切手が発行されても良いのではないかと思われる。

書 評

原書では、各切手にギボンスというカタログ・ナンバーが付記されていたが、日本では私を含めて、スコットというカタログを使う人が圧倒的に多い。そこで、数学者兼郵趣家である訳者の熊原氏は、すべてスコットのナンバーに付け替えられた。この御苦勞により、本書は日本の郵趣家にも使いやすいものになっている。

本書を通じて、数学愛好家や、切手収集家が殖えることを期待している。

(辻 良平)